

## 多くの反響を呼び、大盛況となった 日タイの子どもたちによる国際交流絵画展。

前年に日中間で開催された子どもの絵による国際交流絵画展「みんな友だち ぼくの絵私の絵」が、今年度は日本とタイの間で開催された。双方の国で開かれた展覧会には多くの人が集まり、主要メディアも大きく取り上げるなど、たくさんの反響を呼んだ。日タイの将来を担う子どもたちが自ら両国の新しい交流の芽を育てている。

子どもが描いた300点もの作品が神戸に終結。

今回の交流先としてタイが選ばれたのは、2009年が日メコン交流年にあたっていたからである。また2004年にスマトラ沖地震による津波被害を受けたタイの復興支援を視野に入れ、阪神淡路大震災の被災地である神戸で開催することとした。主催するNPO法人 国際教育情報交流協会の理事長代行の和田智允さんは、展覧会の意義について次のように語る。

「今後の国際交流の担い手となる子どもたちが主体となり、言語を問わずコミュニケーションが可能な絵画を通じて語り合うことで、相互理解と平和な世界を作ることを目的としています」

日本での展覧会は2009年11月16日の開会式に始まり、11月29日まで神戸市役所市民ギャラリーにおいて開催された。開催にあたり、ポスターやチラシの配布をはじめ会場設営や受付に兵庫県遊技業協同組合の皆さんの協力を得た。

集まった作品は合計で300点。内訳は①神戸市内小学校児童の100点②バンコク・シラチャ日本人学校児童の50点③チュラロンコン大学附属小学校児童の100点④タイバンガー県津波孤児施設児童の50点となっている。どれもこの展覧会に出品することを目的に描いた絵から選抜されたものだ。バンガー県の子どもたちは「私の住む世界」と題し、青い空や海、ヤシの木、真っ赤な太陽などを描いた。被災に負けることなく、繊細で豊かな感受性のある作品が多いことが印象的である。



神戸での展覧会のテープカット



神戸会場では兵庫県遊技業協同組合が会場の設営や受付などをサポート



来日にあわせ神戸の小学校を視察するアンバイ・チラナサさん。図工の授業では偶然パチンコ台を制作していた



タイで開かれた展覧会の様子。多数の来場者やメディアが駆けつけた

開会式では在大阪タイ王国総領事館副総領事、チュラロンコン大学教育学部副学部長や米田兵遊協理事長の挨拶があった。この模様はNHK総合テレビ、サンテレビ、神戸新聞、毎日新聞などでも大きく取り上げられた。

「バンコクにお孫さんがいる祖父母の方が遠路はるばるその作品を見に来られましたし、テレビを見て来場された大学生や学校の教師などもいました。期間中、多くの来場者があり予想以上の反響でした」と和田さんは語る。

300点にのぼる作品の収集と搬送にはかなり気を遣われたそうだが、その苦勞が報われる結果となった。

### 日タイそれぞれの 特徴が浮き彫りになった展覧会。

一方、バンコク展は2010年2月19日～28日の日程で、「バンコク芸術文化センター」で開催された。日本展と同じ300点に加え、日タイ両国の指導者の絵画作品各10点も追加展示された。

タイ側の窓口はチュラロンコン大学 教育学部のアンバイ・チラナサ 副学部長である。同教授は、日本への留学経験もある親日派だ。タイ展の開会式は隅丸優次 在タイ日本国特命全権公使とチュラロンコン大学学長のあいさつから始まった。

今回の絵について、先のアンバイ・チラナサさんは「タイの子どもたちは敬けんな仏教徒で平和を尊ぶ。作品にもそういった特徴が出ている。一方、日本の子どもたちの絵は発想が自由で表現が緻密。お互いのそうした違いや長所を理解しあうことが大切」と述べた。

タイ展では墨を使って絵を描くというワークショップも行われた。慣れない筆や刷毛をもち、最初は半紙で自由に絵を描き、その後3mを超える大きな和紙に川の流れを基調とした絵を仕上げていく。子どもたちの飲み込みは早く、講師として指導した同展実行委員の鈴石弘之さんと松谷武夫さんも驚くほどの出来映えの作品が完成した。

さらに「日本とタイの美術教育」と題した国際フォーラムも開催。アンバイ・チラナサさんや鈴石さんらがパネリストとして参加して、両国の美術教育の現状などを紹

担当者より



長年の夢を  
ついに実現することが  
できました。

NPO 法人 国際教育情報交流協会  
理事長代行  
和田智允さん

今回はAJOSCと兵庫県遊協様との共同助成をいただきました。県遊協様には神戸展で人的なサポートもいただき、現地に拠点のない私たちにとって大きな支えとなっていただきました。この展覧会は両国の交流を深めると同時に、多くの報道によって皆様の活動の意義も広く知らしめることができたと考えております。



なれない筆で描くバンコクでの墨絵のワークショップ

介したあと、活発な討論がなされた。フォーラム終了後も日本のパネリストたちに質問が飛び交うような熱心さだった。

タイの展覧会の模様は現地メディアでも盛大に取り上げられたほか、現地駐在員向けの情報誌「WISE」などで事前に告知されていたこともあって、期間中の入場者数は2,000人に達した。

「昨年の中国もそうでしたが、タイからも来年度もまた開催して欲しいという意見を頂きました。予算等の問題もありますので難しいのですが、これだけ盛況であるなら、今後は1対1ではなくアジアのネットワークを組みながら行うような取り組みも視野に入れたと思います」と和田さんは語る。

### 兵庫県遊技業協同組合から

日タイの友好を深め、何より子どもたちの笑顔を見ることができ、たいへん満足しております。